

研究室名	神経生物学研究室 学会発表
------	----------------------

【発表者について】アンダーラインは本学教員、研究員および技術職員、○は発表者、※は大学院生、卒研生または卒業生

発表時期	2018年6月18日
学会名	第31回国際神経精神薬理学会 (CINP World Congress)
演題名	Rapamycin ameliorates impairment of social interaction in the mice exposed in utero to valproic acid
発表者	○ <u>Kotajima-Murakami H</u> , Kobayashi T, Kasai H, Sato A, Hagino Y, Tanaka M, Nishito Y, Takamatsu Y, <u>Uchino S</u> , Ikeda K.
内容	<p>2018年6月16日から19日に、Austria Centre Vienna（オーストリア）で開催された第31回国際神経精神薬理学会において、元博士研究員の村上浩子が発表を行った。本研究は、内野研究室と東京都医学総合研究所依存性薬物プロジェクト池田和隆研究室との共同研究である。結節性硬化症は脳や肺、皮膚など複数の臓器に過誤腫ができるとともに、てんかんや自閉症などの脳疾患を併発する難治性疾患である。病因として、mTOR系シグナルの一つであるTSCが関与していることが知られている。池田研究室では、結節性硬化症の病態モデルマウス（TSC欠損マウス）にmTOR阻害剤であるラパマイシンを投与することで、自閉症様行動が緩和することを見出した。そこで、内野研で行っていた胎児期のバルプロ酸（VPA）暴露による発達障害モデルマウスにおいてmTORシグナル系の遺伝子発現を解析した結果、複数のシグナル分子の発現が野生型と異なっていることが判明した。さらに、VPA暴露病態モデルマウスにラパマイシンを投与することで、社会性異常行動の軽減が確認された。今後、発達障害の創薬研究への発展が期待される。</p>